

以下の文章中には、ねつ造された石器またはそれ  
に基づく論考や記述をしている部分があります。取  
り扱いには十分ご注意ください。

## 1999年度宮城県内主要発掘紹介

### 上高森遺跡第5次調査

調査期間 1999年10月20日(水)～1999年11月3日(水)

調査主体 上高森遺跡調査団（団長 藤村新一）

東北旧石器文化研究所・東北福祉大学考古学研究会

#### 第5次調査の目的

今回の調査では、これまで最下層であった19層上面よりもさらに下層の石器群の発見を目指すとともに、石器埋納遺構などの遺構などの検出にも努める。

#### 第5次調査の成果について

1. 今回、B地点D・E・F-9区において、昨年まで日本最古とされた19層上面より約1.5m下位の37層上面から、径1.0～1.5mの石器集中地点が3ヵ所、22点の石器が発見された。

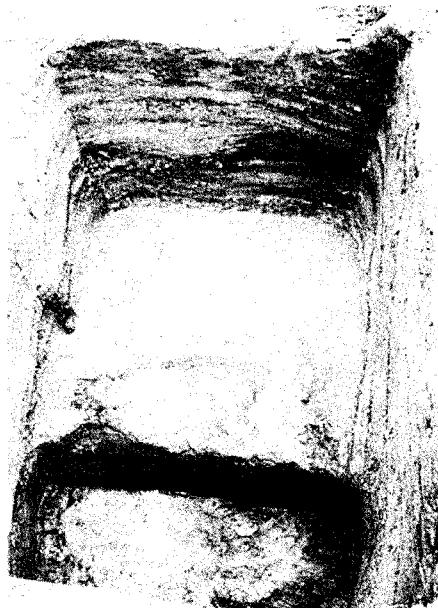
E-10区の一部を試掘した結果、37層上面よりさらに、1.8m、19層上面から3m以上も下位から3点の石器が発掘された（仮C層）。さらに、同区を北に約50cm拡張したところ、仮最下層1から50cm下位から石器1点が発見された（仮E層）。

これらの事実から、これまで日本最古とされていた本遺跡19層の上面の年代60万年前を層位的に見て大きく遡ることは確実である。

2. B地点C-6区で、昨年の19層上面検出の石器集中地点内から新たに2点の尖頭器が発見された。また、隣接するD-6区で径2mの範囲から頁岩製の小型両面加工尖頭器、壁玉製のくさび形石器などが発見された。

3. B地点A-1区の16層上面から、昨年まで発見された4例と同様、新たに径15cm・深さ5cmの穴に石器3点が平行して並べてあった石器埋納遺構が1ヵ所発見された。

(上高森遺跡調査団)



上高森遺跡最下層の石器出土状況  
(仮C層上面・仮E層上面)

## 嘉倉貝塚

嘉倉貝塚は栗原郡築館町玉沢字嘉倉に所在し、伊豆沼の北西約2km、伊豆沼の北岸に発達した東西に延びる標高約20mの丘陵上に立地する。

99年度は遺跡内を横断する県道南側を調査の対象とし、その東半部の調査の結果、縄文時代前期後半～中期前葉を中心とする数十軒以上の竪穴住居跡、掘立柱建物跡や貯蔵穴、柱穴などが発見され、本遺跡が大規模な集落であったことが明らかとなった。

竪穴住居跡は長方形あるいは正方形を呈し、3m以下から大型のものが同じ場所で何度も立て替えられている。今回の注目すべき成果として8m以上の大型住居が多数確認されたことが挙げられる。常に45号住居跡は幅3.5m、長さ18mと非常に細長く、宮城県内最長である。平面図は両端が細くなる長方形で、床面には周溝が巡り、中央には6カ所の地床炉と6本の主柱穴が認められる。

また、柱穴が非常に多く見つかっており、多数の掘立柱建物跡があったと思われる。中でも103号掘立柱建物跡は長さ9m、幅4mと大型で、10本の太さが最大約25cmの角材状の大型加工材であることが柱痕跡から明らかになった。

遺物のほとんどは大木4～7b式期のものであり、多量の土器や石器をはじめ蛇紋岩製块状耳飾り、粘板岩製の垂飾品や石剣等の石製品、板状土偶、耳飾り、イチジク形土製品等の土製品や、焼けたシカやイノシシの骨なども発見された。

今後の調査の進展により集落の空間構成がより明確になるものと思われる。この頃の大型の建物跡を含む集落跡は東日本で多数見つかっており、本遺跡は県北地域での初めての発見例となった。

(宮城県文化財保護課 須田良平)



45号住居跡全景

## 新金沼遺跡

新金沼遺跡は、高規格道路「南三陸自動車道」建設に伴う発掘調査を行っているもので、平成7年度から平成11年度までの5年間行っている。

新金沼遺跡は、標高約1.5~1.7mの微高地に立地しており、この微高地は縄文時代中期に形成された浜堤である。遺跡の北東部には河川が近くに流れていると考えられる。

これまでの調査で、堅穴住居跡が約40軒、土壙数十基、溝跡等が検出されている。住居跡の多くは焼失住居跡であり、屋根材のカヤ等が残っていたものもあった。また、住居跡の埋土内に灰白色火山灰を含んでいるものがある。遺構外からは、表土剥ぎの際にわずかに弥生時代の土器などがみられたが、住居跡からは土器等の遺物が多数出土しており、土器の特徴から古墳時代前期（塩釜式）がほとんどである。

この遺跡からの出土品で特筆するものとしては、北海道系土器の続縄文土器（後北C2一D式）が住居内から1個体していることと、関東地方で出土している東海系土器と呼ばれている土器（高杯・口縁部に縄目紋がある複合口縁壺・S字状口縁甕など）が出土していることである。また、鉢状を呈した土器の体下端（底部近く）に穴が2つあるものが出土している。この穴は注ぎ口のようでもあるが、茨城や神奈川などから出土例のある三連結土器の可能性も考えられる。

これらの遺物のほかに、住居内からはガラス玉や管玉、土玉、石製品、木製品、石鏃等が出土している。

新金沼遺跡は、浜堤上に立地しており、近くには河川と海があったと考えられることや北海道系土器や東海系土器が出土していることから広範囲にわたって交流を行っていたことが推定される。交流のルートとしては、近年、続縄文土器が三陸沿岸から見つかっていることや東海系土

器の流入などから

海上のルートが考

えられる。

(石巻市教育委員会 芳賀秀実)



体下端に穴が2つある土器

## 郡山遺跡

郡山遺跡は、仙台市太白区郡山二丁目から六丁目にわたる、飛鳥～奈良時代の官衙・寺院跡である。仙台市教育委員会では、昭和54年度以来継続的な調査を行ってきている。これまでの調査から、7C後半から8C初頭にかけての2時期にわたるI期・II期官衙とII期官衙に付属する寺院などがあったことがわかつている。今年度は付属寺院（郡山廃寺）の範囲確認を目的として発掘調査を行った。

これまでの調査により郡山廃寺では東・西・北の三辺が明らかになっているが、南辺は不明であった。今回、廃寺推定域南側で行った第128次調査により、寺院南辺の堀と考えられる材木列跡とこれに付設された八脚門とみられる建物跡を発見した。この門跡は、桁行3間（柱間寸法140+230+140cm、総長5.1m）、梁行2間（柱間寸法205cm等間、総長4.1m）の東西棟で、柱痕跡は直径25～30cmである。同位置でほぼ同規模の建替えがある。材木列は幅35～63cmの溝状の掘り方に直径10～15cmほどの丸材が密接しており、これまで発見されていた他辺と同様の状況である。堀は門の棟柱に接続しており郡山廃寺の「南辺」となり、「南門」に接続していたと考えられる。

これにより郡山廃寺は、四周を堀が巡っていたことが明らかになり、東西120～125m、南北167m程の広がりが明らかになった。よって郡山廃寺は、陸奥国府多賀城の付属寺院である多賀城廃寺より規模の大きい寺院であることがわかつた。今回発見された「南門」を含め、これまで発見されている「講堂」、「僧房」などの配置から、金堂、塔、中門などの主要な建物の位置もほぼ推定され、伽藍配置を考える上で大きな成果となった。推定される郡山廃寺の主要な建物配置（伽藍）は、多賀城廃寺ときわめて類似しながらも、寺域内の西寄りに位置していることが明らかになった。

(仙台市教育委員会 松本知彦)



郡山廃寺南門跡



郡山廃寺出土軒丸瓦、平瓦

## 多賀城跡第70次調査

多賀城跡の第70次調査では昨年度に引き続いだ城前地区の調査を実施した。本地区は、政庁から南東に延びる南北約200m、東西約70mの広さの緩やかな丘陵部に位置している。この丘陵の西裾を通る南北大路の第44次調査で、東側溝に取り付く暗渠から奈良時代の郷里制や兵制に関わる木簡が出土している。宮城県多賀城跡調査研究所ではこの城前地区における官衙の構造と変遷および性格を明らかにすることを目的として昨年から3ヵ年計画で調査を実施している。

調査の結果、掘立式建物跡20棟、柱列跡20条、竪穴住居跡1棟、焼土整地4ヵ所、焼面4ヵ所、鍛冶炉1基、瓦組暗渠1など多数の遺構を検出した。遺構は、調査区中央の丘陵尾根部とその東西両側斜面部の3ヵ所に集中し、それぞれの間は遺構のない空白地となっている。建物跡は尾根部に東西棟が、東西斜面部には主として南北棟が建てられている。このことは奈良から平安時代にかけてこの場の使われ方が長期間にわたって踏襲されていたことを示している。

遺構の残りの良い東部では、焼土整地や焼面が検出されている。焼土整地は大規模な火災を反映したもので、宝亀11(780)年の伊治公皆麻呂の乱後の造営に伴うものとみられる。

(宮城県多賀城跡調査研究所 阿部 恵 柳澤和明 白崎恵介)



多賀城跡第70次調査全景

## 桃生城跡

桃生城跡は、桃生郡河北町飯野字中山を中心に字碓畠、字高屋敷、同郡桃生町太田字沢入畠にかけて所在する。立地する地形は、東西3.5km、南北4kmの不正方形の独立丘陵で、本遺跡はその南西の端に位置する。

宮城県多賀城跡調査研究所では、これまでの第1～7次調査（昭和49・50、平成6～10年度）によって、政庁の規模と建物配置、外郭区画施設の位置や構造を明らかにしてきた。

平成11年度に行った第8次調査は、平成9年度から継続して行った政庁地区の西に隣接する緩やかな丘陵部分を対象とした最終年度にあたる。今回発見した主な遺構に、区画溝1条、掘立式建物跡4棟、竪穴住居跡2棟がある。区画溝は、本地区の官衙を東西に二分するもので、その西側で6間×2間と5間×3間の大規模な建物跡を検出した。これらの建物は火災により焼失しており、宝亀5（774）年の海道蝦夷の蜂起によるものと考えられる。また住居跡は、遺構と遺物の検討から、桃生城造営期と桃生城廃絶直後のものであることがわかった。

平成12年度からは、桃生町に所在する西郭部分を調査する予定でいる。

（宮城県多賀城跡調査研究所 後藤秀一 吾妻俊典）



桃生城跡第8次調査区全景

## 伊治城跡

伊治城は、神護景雲元年（767）に創建された城柵で、宝亀11年（780）には、伊治公啓麻呂が按察使紀広純を殺害する事件が起きた場所として知られている。

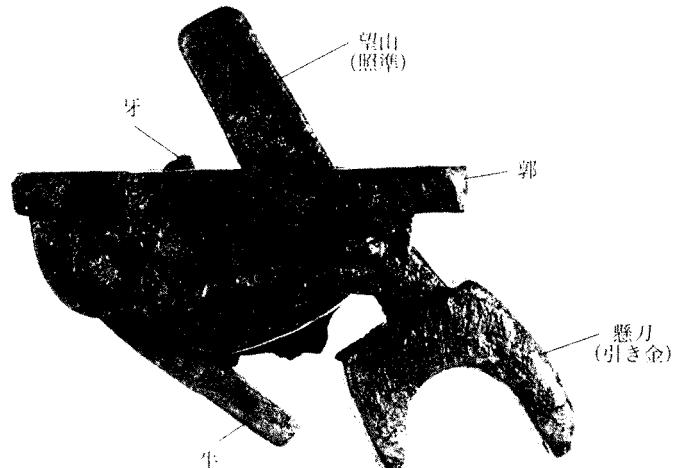
本遺跡は、宮城県多賀城跡調査研究所が、昭和52年から3年間発掘調査を実施し、昭和62年からは築館町教育委員会が宮城県教育庁文化財保護課の協力を受けて、発掘調査を実施している。

今年度の調査は、昨年度の調査で、堅穴住居跡（SI491）から国内で初めて「弩」の一部（機）が出土したことから、この住居跡の全容解明とこの地点のさらに北側の状況を明らかにすることを目的に調査を実施した。

今回の調査により、弩が出土した堅穴住居跡（SI491）は、東西5m・南北4mの長方形であり、床面には数ヶ所の焼け面がある。また、カマドは、凝灰岩を長方体に加工したもので門形に組んで構築されていた。また、新たに検出された住居跡（SI490）は、一辺が約8mと推定される大きなもので、カマド形土器が出土した。カマド形土器は、県内では多賀城跡周辺以外から初めての出土であり、一般の集落には普及しなかった特殊なものと考えられる。

「弩」は、銃床のような台に弓をとりつけたもので、西洋ではクロスボウと呼ばれている。「弩」は文献にはしばしば現れており、「弩」の出土はこれらを具体的に裏づけることになった。

（築館町教育委員会 千葉長彦）



SI491出土弩（機）

## 新田柵跡推定地

新田柵跡は、奈良時代に律令政府が陸奥国の大崎地方における支配拡大を目指して設置したと推定される城柵の1つである。

田尻町北西部の丘陵上は、奈良時代・平安時代の瓦が広い範囲で出土していることや、土手状の高まりが東西約1.5km、南北約1.7kmにわたって存在していることから、新田柵跡推定地として注目を集めてきた。

田尻町教育委員会では、八幡地区を東西に走る農道の改修工事に伴い、平成9年から発掘調査を行い、平成11年度は新田柵跡推定地南西部の調査を行った。

その結果、掘立柱八脚門と推定される遺構2つと道路跡を確認している。門跡はそれぞれ2時期あり、1つは2時期目の建物が火災に遭っている。2つの門は、外郭西辺推定線上にあることから、外郭西門と考えられる。道路跡は4時期確認される為、門跡がそれ別のある時期のものと仮定すれば、それに対応する可能性もある。

遺構からは8世紀代の土器片が確認されている。今回の調査で出土した漆紙文書は、歴名様文書と推定され、年齢区分に養老令の用語「黄」を用いること、漆紙文書の付着した土器が8世紀代のものであることから、8世紀後半頃の文書と考えられる。

(田尻町教育委員会 関 健吾)



掘立柱八脚門

## 市川橋遺跡

本遺跡は、特別史跡多賀城跡の南面および西面にかけて広がる大規模な古代の遺跡である。平成9年度から多賀城南面における広範囲な確認調査を、昨年度から区画整理事業に伴う事前調査を実施している。土地区画整理事業に伴う調査の2年目にあたる今年度は、古代都市多賀城の幹線道路である「南北大路」と「東西大路」を中心に調査を実施した。その結果、南北大路と東西大路およびその交差点、南北大路を横断する河川と橋の跡などを発見した。南北大路は東西大路との交差点から北に約200mにわたって調査を実施し、建設当初幅19mであったものが23mに拡幅されていること、10世紀前葉以前に河川によって路面が大きく削られ大きな被害を受けていたことなどが判明した。東西大路は南北大路との交差点から約30mにわたって検出し、数時期の変遷があるものの一貫して幅12mの規模であったこと、最も新しい時期の北側溝は南北大路の西側溝と「」字状に続いていることなどが判明した。橋は河川内において、直径約40cmの橋脚を60本発見しており、そこから推定すると、幅約7m、長さ15m以上であり、数時期にわたって造り替えられたと考えられる。年代は8世紀末から10世紀中葉頃である。また、河川からは多量の土器類のほか、出土状況が良好な金属製品が多数出土している。伝世品にしか見られない漆塗りの鞘をもつ刀や黒色漆塗りの鉄製壺鎧などが特筆される。

(多賀城市埋蔵文化財調査センター 鈴木孝行)



南北大路と橋

## 原 遺 跡

原遺跡は、名取市田高字原地内に所在し、JR名取駅の北西約1.5kmに位置し、名取川と増田川により形成された標高8~9mの自然堤防上に立地している。

遺跡は東西約600m、南北約500mの範囲で、弥生前期から近世にかけての遺構・遺物が発見されている。名取市教育委員会では、(株)ダイエーの店舗建設計画に伴い平成10年5月から平成11年9月にわたって調査を行ってきたもので、今年度の調査は、調査対象区域の南側で店舗計画地の14,000m<sup>2</sup>を発掘調査し、その成果から特に本書では、中世の溝で区画された屋敷跡について報告する。

発見された掘立柱建物跡群を溝で囲む居館跡の地割りは、幅2m前後、深さ0.8~1.2mの溝を巡らす一辺が約66mの方形に近い区画と推定される。

屋敷内の状況は、屋敷内部にもある時期から幅1mぐらいの溝による区画が造られ、外周北側の溝に沿って柵か堀跡の痕跡が検出されている。また、屋敷内のほぼ中央付近には主屋(3回建て替え)を中心に、その東西側には付属施設、さらに屋敷内の北西付近には倉庫や雜舎などが配置され、特に北東付近の遺構がまったく検出されない区画は畠地として利用された可能性が高い。建物跡は建て替えも含め25棟以上になるが、全体で3~4回の建て替えがあったとみられ、他に堀跡、井戸跡、通路など発見されている。この屋敷跡の南側は調査対象外のため不明であるが、屋敷の正面出入り口は南側からと想定される。そして屋敷跡は単独で存在したのではなく、外周溝跡の区画が東側にも続いている。

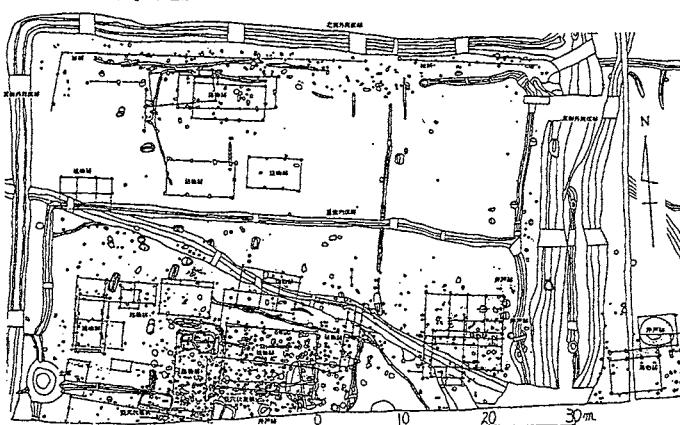
この遺跡は、出土遺物の年代より13世紀後半から14世紀前半に限られるため、14世紀の後半には廃絶したものと考えられる。

遺跡の性格としては、

中世にかけて東北太平洋岸沿いの熊野信仰布教の中心となった名取熊野三社(三山)の熊野別当本拠地の支配圏内の近傍にあたるが、遺構や出土遺物の在り方から在地の村落領主の居館跡と推定される。

(名取市教育委員会  
恵美 昌之)

原遺跡中世屋敷跡遺構配置図



## 保春院前遺跡・養種園遺跡

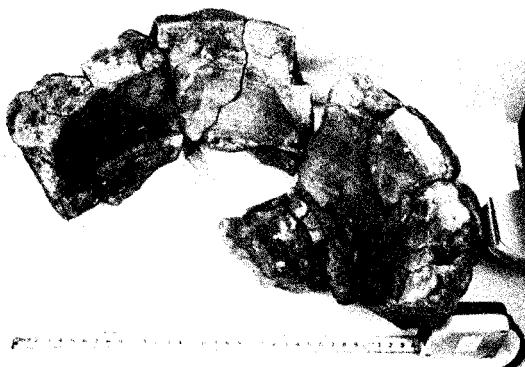
当調査は、都市計画道路の建設に伴うもので、東から順に南小泉遺跡（第28次）・養種園遺跡（第2次）・保春院前遺跡（第1次）が関わる1996年度からの継続調査である。これまでの調査は、南小泉遺跡と養種園遺跡が主で、弥生時代の土器棺墓、奈良・平安時代の集落跡、中世・戦国時代の土坑墓群や屋敷跡、道路跡、近世の溝・水路跡や井戸跡、廃棄土坑等を発見している。

1999年度は、調査対象区域の最も西側に位置する保春院前遺跡（約700m<sup>2</sup>）と、養種園遺跡西部（約780m<sup>2</sup>）を調査した。周辺は、仙台城下と、伊達政宗が寛永4年（1627）に造営した若林城下町が接する地域と見られる。発見した遺構は、そのような土地柄を反映するかのように近世が主体で、七郷堀の旧流路をはじめ、溝跡、土坑、石敷の池跡、建物跡、地下室がある。これら近世の遺構群からは、堤、相馬、岸、美濃、京・信濃系、丹波、肥前・唐津等の陶磁器や、瓦質・土師質土器のほか、炉壁・鋳型・轍の羽口・鉄滓等も出土している。

このほかにも、8世紀代・10世紀後半代の堅穴住居跡や、戦国時代～近世初頭の溝跡・土坑・建物跡を確認した。中でも、16世紀後半頃の瓦質擂鉢が出土したSK338土坑からは鉄鍋（ないし鉄鉢）の鋳型や炉壁が、また16世紀後半～17世紀初頭の中国染付碗を最新遺物とするSK320土坑からは多量の椀形滓・塊状滓が出土し、戦国末期からこの地域ですでに鋳造鉄器の生産が行われていたことが判明した。

前年度の養種園遺跡の調査ではSD202溝跡から明末の染付碗と共に鍛造剥片が、そのさらに前年の南小泉遺跡北西部の調査では、道路跡から戦国期の瓦質擂鉢と共に椀形滓が出土しており、この地域の鉄・鉄器生産をその起源も含めて総合的に検討することが必要であろう。

（仙台市教育委員会 渡部弘美）



出土した鋳型（3区SK338土坑）

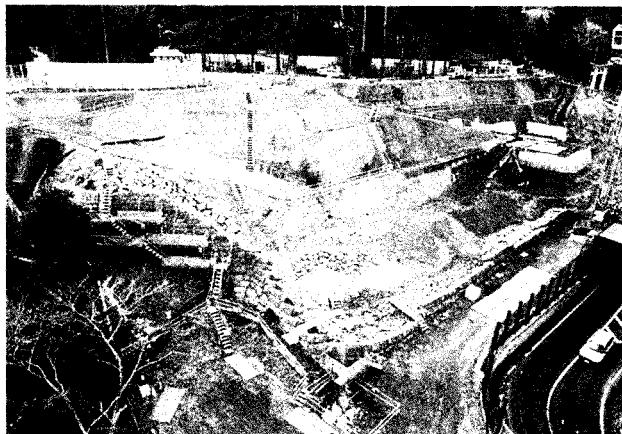


鉄滓出土状況（1区SK320土坑）

## 仙台城本丸跡

仙台城本丸跡では、1997年7月から石垣解体工事に伴う発掘調査を実施しており、現存石垣（Ⅲ期）の背面から、築城期石垣（I期）・修復石垣（II期）および、それらに先行する中世千代城の門を伴う「虎口」跡などが検出された。

I期石垣はⅢ期石垣背面の2ヶ所で検出されている。特に本丸北東部で検出されたI期石垣は、全長15m、高さ4mで、調査が進めば最大で約50m、高さ5m以上となり、発掘された「野面積み」石垣としては国内でも最大規模となる見通しである。II期石垣も同じ本丸北東部で全長20m、高さ10mの規模で検出された。現存するⅢ期石垣は、II期石垣の基部を土台としながら、上部に切石の新石材を積み上げている部分やII期石垣に「もたせ」かけている部分が確認されており、II期石垣が基部や背面でⅢ期石垣を支える構造を持っていることが明らかになった。



Ⅲ期石垣の内部から検出されたI・II期石垣

II期石垣の盛土中から角礫（割り石）を充填した排水施設が検出された。この排水施設は、幅約2～4m、長さ6m以上で、盛土中に埋設された暗渠と考えられる。この排水施設は、II期石垣の裏込石層に30度前後の傾斜角度で連結しており、盛土の嵩上げ作業と並行しながら石垣の背面に埋設された。盛土中に埋設された排水施設が、大規模かつ構造的に確認された例は全国的に少ない。検出されたII期石垣の排水施設は、Ⅲ期石垣工事の際に解体されずに残され、Ⅲ期石垣（現存）の中で再利用され機能している。

（仙台市教育委員会 我妻 仁）



盛土中に埋設された排水施設（暗渠）